

男らしさ女らしさ、自分らしさ



「寛幸、何しているの。恵君、もう迎えに来てくれているよ。」
「はーい。」

と、返事をし、「学校行きたくないなあ。」とつぶやいた。

毎朝、寛幸は、野球部の練習に、恵と一緒に参加している。恵は、小学生の頃から少年野球チームに所属していて、一年生ながら次の新人戦では、レギュラーとして先輩と試合に出られそうな勢いだ。寛幸はそんな恵と一緒に、野球部に入部した。どこの部活動に入ろうか、ずいぶん迷った。いろいろな部活動に見学に行ったが、結局、野球部にした。入部届を出すとき、頑張るぞという気持ちでいっぱいだったが、心の奥に、何かつかえるものがあったことを今でも覚えている。

六ヶ月前、中学生になり、慣れない制服や新しいクラスメイトに戸惑い、毎日が精一杯だった。部活動は、野球部に入部しようと思うことを家で話すと、野球ファンであるお父さんはとても喜んで、

「寛幸、キャッチボールならお父さんも付き合うぞ。」

と、押し入れの中からグローブを出してきた。

「野球部って、土日練習試合とかに行くのよね。お弁当作らなくちゃね。」

お母さんも張り切り切りました。そんな二人の気持ちに応えるように、

(レギュラー目指して頑張るね。)

と、言葉に出さずに、心の中で何度も何度も繰り返した。

体を動かすことは嫌いではない。野球も少しずつ上手になってきて、最近では顧問の先生にも褒められるようになってきた。勉強は嫌いな教科もあるが、英語の授業は好きだ。英語を話す活動では違う自分になれる気がする。でも学校にいと、何かに覆われている自分を感じることがある。そのことを誰かに伝えたことは一度もない。



拓巳：中学1年生。
野球部に所属。



寛幸：主人公
中学1年生。
野球部に所属。



星香：中学1年生。
サッカー部に所属。



恵：寛幸の友達でよき理解者。野球部に所属。

朝練習が終わり、恵と一緒に昇降口にいると、サッカー部の朝練を終えた星香が、「おはよう。今日も暑いね。」

と、日に焼けて真っ黒になった笑顔で近づいてきた。星香は、サッカー部に入っている。部員三十六名中、女子は一人だ。寛幸が通っている学校は、制服を選ぶことができる。女子は、スカートタイプとスラックスタイプの二つの中から好きな方を選抜できる。スカートタイプが主流だが、何人かスラックスタイプの制服を着ている女子もいる。星香は、その何人かの一人だ。「おっとお、誰かと思ったら、星香か。後ろから見たら、誰だかわかんなかった。相変わらず、女らしくないな。」同じ野球部の拓己が、後からやって来て、星香をからかうように話はじめた。

「お前さあ、見た目も中身も、全然、女らしくないよね。他のみんなはスカートなのに、ズボンをはいて、大股で歩いている。サッカーやっている姿なんか、まるで男。」

寛幸は、拓己に何かを言いたかったけれど、何も言えず、目を伏せた。しかし恵は違った。

「サッカーやっている星香は、格好いいよ。体格は他の部員よりも華奢だけれど、スピードがあるし、体力もある。ズボンだって、はきたい方を選んで、はいているだけだろ。」

恵のこういう所が好きだ。思ったことを、きちんと言え。自分は……。

ああ嫌だ。拓己も、学校も、自分も、何もかも嫌だ。

一時間目は英語だ。いつもは楽しい英語も、今日は集中できない。嫌なことが、次から次へと思い出されてくる。

小学生の時、味噌汁を作り、レポートにまとめる宿題が出た。クラスみんなは「面倒くさい」と文句を言っていたが、寛幸はワクワクした。近くに住むおばあちゃんの家に行き、煮干しと鰹節で、丁寧に汁をとった。具が問題だ。色々迷っていると、おばあちゃんが、畑から埼玉青なすを収穫してきてくれた。埼玉青なすは形は丸く、身が締まっていて、火を通すととろけるような食感になり、寛幸は大好きだ。埼玉青なすとネギ、厚揚げで味噌汁を作り、おばあちゃんやお父さん、お母さんに振る舞った。みんな「美味しいし、栄養満点!」と喜んでくれた。寛幸はそれをレポートにまとめ、学校に持って行った。担任の先生が、寛幸のレポートを褒め、クラスみんなに紹介してくれた。

「なんか寛幸ってさ、女みたい。料理とか得意そうだし、この間なんか編み物をやってみたって言ってたんだぜ。」
クラスメイトのひそひそ声が聞こえてきたが、それ以降は、何も聞こえなかった。

(料理が好きだっていいだろ。男も女も関係なく、美味しい料理を作る料理人はいるだろう……。編み物だって……。)

英語の小池先生の話す声が遠くで聞こえ、現実には押し戻された。何かには押しつぶされそうな気持ちで授業を受けていたら、小池先生が「coming out」について話し始めた。小池先生の話は、いつも面白い。

「come outは『くから出る』、よくcoming outと言うけど、じゃあ、どこから出てくるのかな。語源はComing out of the closet.なんだよね。」

クロゼットから出る、クロゼットにしまい込んだ本当の自分。本当の自分って、何なんだろう……。



夕方、お母さんにちよっと出かけてくると言い、ヒグラシの鳴く公園を、ゆっくり歩いてきた。すると、ランニングコースを走る星香に会った。

「寛幸、どうしたの。珍しいね、こんな時間に。」

星香は汗を手で払いながら、近づいてきた。

「そういう星香こそ。」

「いつも、この時間はトレーニングだよ。サッカー部の他の人達より、体力がないからね。あの中でレギュラーをねらうには、まずは体力をつけようと思って。」

「今日さ、拓己が嫌なこと言っていたよね。何か言い返したかったんだけど、何も言えなくて、ごめん……。」

「全然気にしてないよ、って言うか、言われることに慣れたかな。小学生の時はいろいろ悩んだし、家でも、女らしくって言われてた。」

「そうなの？」

「うん。でもね、正直、女らしくとか、男らしくとか、よくわかんなくて。何かをやる度に、これでいいのかなくて考えるようになった。好きなサッカーも、やっちゃいけないのにな。どんどん自分が自分らしくなくなっていくのがわかった。先生が、よく夢について話していたけれど、何も思い浮かばなくなってきた。それで、女らしくよりも、自分らしくを優先させるようにしたんだ。そうしたら、好きなサッカーを頑張る自分を好きになった。ただ、それだけ。じゃあね。」

ランニングコースに戻り、走り去っていく星香をながめていた時、本当は、野球部ではなく、家庭科部に入りたかったことに気付いた。部活動見学会で、「おむすびレシピコンテスト」に向けて頑張っている家庭科部の様子を、廊下からそっと見ている。

た。自分だったら、あんなおむすびを作るのに、などと考えていた。料理を考えている自分はきつと星香と同じ顔をしているだろう。でも、家庭科部に入ったら、またからかわれるかもしれないと思って、入部するのをやめた。野球部なら恵もいるし、きつとお父さんも喜んでくれると思ったから。

「自分らしさか。」

声に出して言ってみた。自分を覆っているものが、ほんの少し軽くなった気がする。

翌朝も恵が迎えに来てくれた。恵と話をしながら学校に向かう。ふと、恵になら、自分らしさについて話してもいいかな、という気持ちになった。

「恵ってさ、自分らしさについて考えたことある？」

「うん。どうだろう。でも、自分の信念や考えをもって頑張っている人って、格好いいと思うよ。この人は、こういう信念をもって頑張っているのかな、って考えると、自分も、自分らしく頑張りたいと思うかな。今は、野球に夢中だけだね。」

恵の笑顔は、キラキラしている。その理由が、今、わかった。自分はこれからもこの恵の笑顔に励まされながら、クロゼツトから一步一步、歩み出ていくのだろう、とふと思った。そして自分も恵みたいにな……。

学校に向かう道がいつもと違う気がしてきた。まだまだ暑さが残っている中、汗をかきながら、一步一步進む先にあるのは、今まで自分が感じていたものではなく、顔を上げ胸を張って過ごせる日々かもしれない。

(そうだ、いいことを思いついた。)

「今度、いつもよりも三十分早くうちに来てよ。朝ご飯作るからさ。食べてみてよ。」

と、寛幸は笑顔で恵を誘った。

「やったー。喜んで！」

恵も、満面の笑みだ。

さあ、何を作ろうか……。

